

空の
写真

人には、思い出すとひっくり返ったりじたばたしたり、なんかわめいたり壁殴ったりしたくなるような記憶のひとつやふたつ、かならずあつたりする。時間が経過してみれば「それほどのことか？」と自分でも思わないでもないのだが、そうした把握とは別に、とにかく恥の感情みたいなのが圧倒的なうねりをもって理性を蹂躪する。そういうやつだ。俺にとつてのそれは、鵜野森ひたきという女子が絡んでいる。

中学のころは、同じクラスだった。

高校は別だ。向こうは学校始まって以来の神童とやらで、地元の公立中学からは初となる有名な女子校への進学を決めた。それつきり、互いに連絡はない。たぶんこのまま会うことはないだろう。きつとこうしていつかは、この感情も薄れていくに違いない。

バイト先に田村さんという人がいる。50歳にして筋骨隆々、半生を現場で過ごしてきた筋金入りの職人である。その人が言っていた。

「俺も若いころはヤンチャしたもんだがな」

「はあ」

「ヤンチャして楽しかった記憶は残ってねえのに、迷惑をかけた相手のことだけは覚えてるんだわ」

「そうですか」

「若気の至りつてのはな、橋本、残るぞ」

ヤンチャ自慢から急転直下の自虐。なにがあつた田村さん。

だめじゃん。

めっちゃ残るじゃん。

が、まあいい。高校の3年間、一度も会わなかつた相手だ。この先の人生で会うことはもうない。仮に俺が海老反りになつて痙攣するような思いをしようと、それは俺が墓のなかまで持つていけば済むことである。

なのに。

なぜこうなつた。

俺は、鵜野森のつるんとした膝にばんそうこを貼りながらいやな汗をかいていた。

時間は少し遡る。ていうか今朝のことだ。

3月も末となれば、日差しだけはけっこうぼかぼかしたもんである。俺の部屋は東南向きで、朝日がよく差し込む。

しぜんに目が覚めた。

春休みというのは、独特の雰囲気がある。ひとつの学年が終わり、次の学年が始まるまでの隙間。タイミンングによっては、学校すら変わる。連続する時間のなかのエアポケツト。そんな感じだ。

「祥太郎、起きてるのかい」

母ちゃんの声でした。

俺のことなどどうでもいい以上に、俺の母ちゃんのことなどどうでもいいとは思うのだが、母ちゃんの声はすごいでかい。俺と違って小柄なくせに、とにかくバカみたいに通る声をしている。体全体が共鳴している謎の楽器のようだ。しかもヘビースモーカーであるせい、声がびびり割れている。朝からデイスティン母ちゃんボイス。きつい。

どたどたと階段をのぼる音が聞こえてきて、ドアがどんどん叩かれた。したがって、さっきの声は1階から轟いてきたものである。なぜ明瞭に聞き取れるって話だ。

「もう起きてる」

しぜん、俺も大声になる。

ドアが開いた。

「ならさっさと下りてきて、朝ごはん食べて、バイト行きな」

「バイトなら昨日で終わったよ」

「ああ、そうだったか。ごはんできてるからね」

「ありがとう」

母ちゃんが下りていく。

そう。今日からもう、俺にはやることはない。

大学は受験した。ここらじゃひとつしかない公立の大学に合格した。

けど、行かなかった。

理由は、いろいろある。あるような気もするが、ないような気もする。

そんな曖昧な理由でも、母ちゃんは許してくれた。ただし受験料その他は全額返せとのことで、辞退を決めたその日から、俺は建設現場で働いた。幸いにして体格はいいほうだ。体力にも自信はある。最後には「おまえ、大学なんて行かないでここで働け」と田村さんから言ってもらえるほどになった。なお自衛隊のおっちゃんにスカウトされた経験が、人生で通算二度ある。もちろん、母ちゃんには受験でかかった金をすべて返済した。結果として俺には、自分が決意しない限り終わらない永遠の春休みと、15万円の現金が残った。

ベッドから体を起こす。

この1ヶ月近くのバイトのあいだで、めちゃくちゃ筋力ついた。このあいだ体脂肪計で計測したら、体脂肪率が15%になっていた。俺の肉体やばい。腹筋の力だけで跳ね起きられそうな気もしたが、俺の体格でそれをやるとベッドがぶつ壊れる。なので、ふつうに起きた。

カーテンを開いて、窓を開ける。

晴れている。

とはいえ、春の空は曖昧だ。ほんやりと、同じトーンの水色がどこまでも続いている。

スマホを手にとる。別にどこからも連絡はない。友人は少なかった。その少ない友人とすら、高校を卒業したあとは切れてしまったような感じだ。スマホで見るのは、だれもが使っている緑色の画面のメッセージアプリよりも、某SNSのほうがはるかに多い。

とはいえ、それですらもリアルつながりの知人はだれもない。主に写真を流すアカウントをフォローしている。眺める用だ。自分でつぶやくことはほとんどない。

起動してみると、そのうちの一人の投稿が流れてきた。

空の写真だった。数本の電線が横切っている以外は、なにも情報がない。俺が見ているのと同じ、ほんやりとした春の空だ。

変わったアカウントで、とにかく文字でのつぶやきはいつさいない。更新頻度は低い。

2週間とか、3週間に一度とか、まれに空の写真を投稿する。それも映えを狙ったようなものではない。どこにでもあるあたりまえの空なのだ。

なんとなくだった。

ふだんならまずしない、いいねをした。

階下へ下りる。

習慣的に、まず父の仏壇に手を合わせる。

朝食は納豆と味噌汁、それに野菜炒めである。

テーブルにスマホを置いて眺めながらの食事だ。

あまり行儀のいいことではないが、うちは母ちゃんがライターまがいの仕事をしているため、母ちゃん自身、情報機器から手を離すことはほとんどない。

さっきのアカウントを遡って眺めていた。

春から冬へ。冬から秋へ。

たいていは晴れた空だが、同じ青空でも、季節によって雲の感じも、空の色も違う。空を見る。それはいつたい、どんな行動なのだろう。

ほかのものとは違う。

空は、ただの空だ。

しかし、空の写真は、ただの空の写真ではない。

だれかがそれを撮ったのなら、きっとそれは、だれかにとつての空なのだ。

「なあ母ちゃん」

「おかわりなら自分で」

「旅行いってくる」

「は？」

電子書籍のリーダーをいじっていた母ちゃんが、マヌケな声を出して俺を見た。

「旅行って、どこへ」

「さあ」

「決めてないのかい」

「まあ」

「……」

母ちゃんは、俺をじっと見たあと、小さくため息をついた。

「あんた、だんだん父さんに似てくるねえ」

「親父に？」

「ああ」

死んだ俺の親父。

ガンだった。

体調が悪くて入院したと思ったら、あつという間に衰弱していった。末期は、モルヒネのせいか俺の顔もわからなくなっていた。実直な勤め人。無類の本好き。そして――。

「いっついで」

母ちゃんが言った。

「いいのか？」

「金はあるんだろ」

「15万」

「その気になれば1ヶ月は行けるね」

「母ちゃん、平気か？」

「あんたがいなくなつて困るのなんて、トイレの電球が切れたときくらいだろ」

まあ、少なくともメシを作る手間は減るだろう。

「旅つてのはさ」

母ちゃんは、本に目を落としたまま言った。

「帰ってくるもんだ」

「いや、そりゃそうだろ」

「それさえわかっているなら、好きに行ってきな」

自分の部屋に戻って支度をする。

といつても、愛用している帆布のショルダーバッグに、下着とTシャツと靴下を2セット入れた程度。あとはスマホとモバイルバッテリーと現金。これさえあれば、だいたいどうにかなる。小旅行なら、ひとりだけでけっこうしていた。ある程度は慣れている。

10分程度の準備を終え、部屋を出る。

俺の部屋の向かいは、親父の書斎だった部屋だ。

ドアを開ける。

内部は、生前と特に変わっていない。定期的に母ちゃんが掃除をしているらしい。とにかく本が多い。何冊か拝借しようかと思ったが、やめた。本は意外に重たい。

毎晩、どこにいるか連絡するんだよ、という母ちゃんの声に送られて家を出た。

外は、思ったより寒い。長袖のTシャツにやや厚手のパーカーという服装だが、いちお

う上着は持ってきた。が、着るほどではない。

道路に出た。

このへんは、わりと畑が多い。だから、見上げた空は広い。

スマホを空に向けた。

撮った写真を、そのままツイートした。

しばらくすると、そのツイートにはいいねがついた。

そして、フォロワーが一人増えた。

駅までは、バスで15分、徒歩で50分である。別に急ぐ理由もない。歩いて行くことにした。

畑のなかをしばらく歩くと、地元の生活道路に出る。スーパーやコンビニ、飲食店が何軒か。まあ田舎だ。これでもいちおう首都圏の一部ではあるらしい。

なんとなく、親父のことを思い出してしまふ。

きつと、あの日もこんな空だったからだろう。

4月18日。それが親父の命日だ。翌日に通夜があり、その翌日に出棺した。人間を一体焼くにはけっこうな時間がかかる。

特にやることがなかったから、外に出た。

うららかな春の日。煙突からは、弱々しい煙が立ち上っていた。

ああ、人を焼く煙だ。

俺はそう思った。

心電図が平坦な電子音を鳴らしたときも泣かなかった。最後のお別れとやらで、炉に入られるときも別に泣かなかった。人が死ぬことはあたりまえのことであり、たまたま俺の親父にそれが訪れただけである。そんなようなことを考えていた気がする。中3の男なんていう度し難い生物には、そういうアホみたいな矜持だけがある。

あれが、親父の焼かれる煙かもしれない。

そう思ったときに、自分のなかのなにかが壊れた。

あのとときの、ぼやけた空を覚えている。

「……」

ついでに、よけいなことを思い出しそうになった。

やめよう。悶え死ぬ。

そうだ。どこに行くのか考えよう。それがいいそうしよう。

駅に着いたころには、9時近くになっていた。

大手私鉄の終点の駅。駅には、立ち食いそば屋とコンビニが併設されている。それと、やけにだだっ広いバスのりば。駅を背にすると、畑以外なものもない。

まだどこに行くのか決めていない。

駅の裏手に公園がある。そこでコーヒーでも飲みながら考えることにした。いい陽気だしな。

そうして、その公園に鶴野森がいた。

彼我の距離、約20メートル。お互いに視認は十分に可能な距離である。

ちなみに、見間違えようはない。19年にはわずかに足りない短い人生ではあるが、俺は生涯、鶴野森以外に、あんな金髪の人間を見たことがない。まして、あんな無防備にぼかんと口を開けて、ぼんやりと空を見上げている変人など、そうそういるものではない。しかし、鶴野森なら充分にありうる。てゆうかあのサイズはどう見ても鶴野森だろ。

じつとりと、いやな汗が流れた。

よし、逃げよう。

そう決めて、背中を向けた。靴が、砂を噛む音がした。

「あ」

背後から声が聞こえた。

ぎくりとして、立ち止まった。

「はし、もと？」

無視して全力ダッシュを決めるか、それともあいさつだけはするか。

瞬時の迷いが、俺の敗北を決定した。

ザッ、ザッ、と砂を噛む音がした。やがて、んびゃつ、という謎の悲鳴と、ずざーつと、盛大に人がずっこける音がした。なんか散乱する音もした。

おそるおそる振り返る。

そこには、地面に突っ伏した鶉野森と、盛大に散らばったさまざまなもの、特に、手に持っていたらしいスマホは盛大な遠距離を吹っ飛んでいた。そしてバカでけえカバンがあった。

「は、はしもと……」

涙目で、俺に手を伸ばしていた。

俺はなぜこんなことをしているのだろう。

散らばったものを拾ってやり、砂を払ってやった。ベンチに座ったまま涙目になっている鵜野森にそれを渡してやる。スマホの画面は割れていなかった。地面が砂なのがよかったのだろうか。

「……これで全部か？」

「わからない」

「……」

「てきとうに入れてきたので、わからない」

ああうん。このカバンでかいもんね。鵜野森本体が入れそうなくらいに。よくわかんないんだけど、その携帯ゲーム機は必要なものなの？

「……」

さすがに、このままさようならというわけにもいかない。

なんとなれば、ポーター柄のニーソックスの膝のあたりは痛々しい感じで破れている。それはそれとして、鵜野森がやばい。

なにがやばいって、俺が最後に見た、中学のころとほとんど外見が変化していない。

当時ですら、鵜野森はクラスでいちばん小さかったはずだ。俺がそれを記憶しているの

は、俺が低身長マニアだからではなく、いちばん大きいのが俺で、よく身長差の話題でいじられていたからだ。俺が185。鶴野森とは確か40センチ近くの差があった。その後、俺の成長は止まったので、サイズ感覚は変わらないはずである。

あと服装な……。

だぼっとした白いセーターに、チェック柄のミニスカート。それで、とどめにボーダーのニーハイ。絶対領域の白さなんて吹き飛ばほど中学生スピリッツあふれる雰囲気である。

「その、平気か、膝」

「いたい」

「ですよね……」

「でも、へいき。転ぶのは、慣れてる」

「……」

「意外にがんばろう」

「でもけっこう派手にすりむいてるぞ」

「こんなこともあるうかと」

どう考えてもカオスになってるだろうと思われるカバンのなかに手をつ突っ込む鶴野森。
がさごそ。

「……」

そのまま数分が経過。

やることがない。とりあえず、買ってきた缶コーヒーを開ける。

連載を追いかけていたWeb小説の1話分を読み終えたころになって、

「準備してきた」

遅えよ！

むしろ俺なんで待ってたんだよ。

しかもなんでこの子、マキロンなんて持ってるの？

「これで消毒して、それで」

またカバンに手突っ込んだ。

もう逃げるタイミングは完全に逸した。

電子書籍で気に入った4コマの1話分を読み終えたころになって、

「ばんそうこを貼る」

ようやく探していたものが見つかったらしい。

思わず時間を確認した。

駅に着いたのがジャスト9時くらい。現在時刻は9時25分。

たぶん公園についたのが9時5分。鵜野森の荷物を拾うのに5分。あとの15分はただ待ってただけである。時空歪んでんだろここ。

いくら急がないといっても、こんなことで時間を浪費したいわけではない。まして鵜野森とは因縁がある。たぶん俺の側からの一方的な。

マキロンとばんそうこを持った鵜野森が固まっている。

「どうした。塗らないのか？」

「できない」

「ん？」

「自分で、できない」

「は？」

「し、しみるのが……こわい……」
「どうしよう。」

この子、外見だけじゃなく行動も中学生、いや、ひよっとしたらそれ以下……。
待って。この子、うちの中学始まって以来の神童……。

俺の脳裏に、当時の女子たちの会話が蘇ってきた。

『今週のひたき係は私ね』

そうか……そうだった……そうだったよ……。

謎の三段活用をしつつ、俺は頭を抱えたい気分になった。

あくまで噂だ。そう断っておく。鵜野森の名誉のために。

一説によると、体操着の着替えも自分でできなかったとか何とか。少なくとも、上履きを忘れてスリッパで教室を闊歩している鵜野森の姿は、何度も見たことがある。

「はしもと、やって」

そう言つて、鵜野森はじつと俺を見上げてきた。

日の光にも透けそうなふわふわの長い金髪。ばっさばさのまつげもあいまって、なんとなくけだるげにも見える眠そうな目。陶磁器もかくやと思うような真っ白ですべすべの肌。ありていにいえば、とんでもない美少女である。

さすがに、こんなものに涙目で見つめられては、冷静ではいられない。

「じ、自分でできるだろ、そんなの」

「できない。死ぬ」

「生きろよ！」

「消毒が、必要」

「……」

折れる気はないらしい。

ここで断りつつけては、童貞だと思われる可能性がある。そう思われるのだけは避けなければならない。真実はときに人を傷つける。

「貸せよ」

マキロンと、やけにサイズの大きいばんそうこを受け取る。

鵜野森の前にしやがむ。

目の前に、足がある。

なんだろう、この細さ。

てゆうかこれ、顔を上げたらスカートの中に見えるんじゃないだろうか。いや見ないけど。見ないけどさ、それでもほら、たまに人って幻聴聞こえるじゃん。ここにばんつあるよ、ばんつあるよ……とか。

よし。俺はもうだめだ。

深呼吸をした。破れているニーソを静かに下ろす。

「んっ」

鶴野森が小さく身じろぎをした。

膝ですら白い。その白い膝がすりむけている光景は、なかなか痛々しい。が、派手にやっているわりには、深くはないようだ。母ちゃんならツバとけときゃ治るといふ程度の傷ではある。しかし、いったいどんな錬成をしたらこんな人体ができあがるんだろう。

マキロンのキャップを開ける。

「いくぞ」

「い、いたくない？」

外見相応に幼い声が震えている。なにこの謎の罪悪感。

「痛いだろ。我慢しろ」

「やだあ……」

つきあってられない。

傷口に触れないように、慎重に液体を垂らす。

「んびっ」

「我慢しろって」

流れた液体がニーソまで影響を及ぼす。あわてて、自分のカバンからティッシュを取り出す。

「拭うぞ」

「う、うう……んぎっ」

傷口に触れたとたん、鵜野森がひきつったような声をあげる。

疑似エロシーンみたいだからやめてくれ……。

水分を拭ってから、ばんそうこを貼った。

「終わったぞ」

声をかけて、鵜野森の顔を見ると、目をぎゅって閉じている。その目から、涙がぼろぼろこぼれている。

「おわった？ いたいのおわった？」

「……」

なにこの感情。

これが父性本能？

今日の鵜野森ひたき係は俺になるの？

冗談ではない。

「これくらい傷なら歩けるだろ」

「……」

「つーわけで、気をつけろよ」

マキロンとばんそうこの残りを返す。

充分に関わりすぎた。俺は鵜野森と旧交を温めたいわけではない。むしろ逆だ。さつきから俺の脳内に残存してる中学生の俺が悶え苦しんでいる。

それじゃな、と言って、その場を立ち去った。

「まって、はしもと」

「……なんだよ」

「30万円ある」

「金持ちだなあ」

「15万円あげる」

「いらねえよ！ 3年ぶりにあった中学の同級生にそんな大金もらって俺はなにすりゃいいんだよ、怖えよ！」

「PASMOの、チャージを……」

「……は？」

そこで、券売機の前である。

ちなみに鵜野森のカバンはなぜか俺が持っている。重い。いったいなが入っているのか。そしてどうやってここまで運んできたのか。すべてが謎である。

それ以上に謎なのが、

「おまえさ、電車通学だったんだろ？」

「うん」

「3年間、電車通学してて、PASMOのチャージがわかんないとか、おまえ……」
ありえない。

本人いわく定期だったから必要ないとのことだが、そういう問題ではないと思う。

鵜野森の言うまま1万をチャージする。

が、さらに問題なのが。

「……」

改札を入っても、俺はまだカバンを持っている。

この駅は終着駅だ。ということは、電車を利用する者は、必然的に同じ電車に乗らざるを得ない。1本ずらすことも考えたが、そのために15分待つのもなんか腹が立つ。そしてこんなときに限って、ホームに着いたタイミングでちょうど電車が発車するのである。あわてて乗り込んだ。鵜野森とともに。

で、こうなる。

俺は、なぜか鵜野森と二人でクロスシートの二人がけの席に座っていた。

そこしか空いてなかったから！

なんで平日の9時台にここまで埋まってんだよ！

あと、あの重い荷物を通路とか置いとけるわけないし、鵜野森が抱えたら本体よりも大きいでしょう!? 網棚に上げるしかなかったんだよそしたら流れでなんとなく隣に座ることになったんだよ！ ああもうこいつちっちゃいなあ！

気が気じゃない。鵜野森が中学のころのこと思い出して語り始めでもしたら、俺はその場で死ぬ。ていうか次の駅で下りる。むしろなにもなくても次の駅で下りる。

「……」

そこで、不意に気になった。

鵜野森は、なんでこんな大荷物を持っているのか。どこへ行くのか。どう考えても一人で旅行なんてできる人間ではない。春休みだから、学校も関係ない。別に知る必要もないのだが、下手に隣になんて座っているものだから、間がもたない。

窓にへばりついて景色を眺めている鵜野森に聞いた。

「おまえ、どこ行くの？」

「……」

鶴野森は、のっそりと窓から顔を離すと、俺を見た。

「家出」

「……はい？」

「朝起きて」

「……」

「くつしたをはいて」

「……」

「穴があいてた」

「……」

どうしてこいつは、発話ごとに数秒の間が空くんだろう。いにしえの音声チャットはこんな感じだったと、バイト先のおっさんである一ノ瀬さんから聞いたことがあるが、リアルで遅延が発生するのはどうなのか。

「そしたら、お母さんが、それを見て、爆笑して」

「……」

「むかついたから家出した」

「するなよ！」

さんざん待たされたせいとか、ものすごい食い気味に言ってしまった。

「くだらない家出の理由ランキングで、今後数十年はトップ10にいられるぞそれ……」
ものすごい疲れる。

こうしているあいだも、鵜野森に関する情報はけっこう思い出している。というより、必要がないからふだんは思い出さないだけで、こうやって会ってしまえば、中学のころの教室の様子が勝手に出てくるのだ。

鵜野森は美少女だ。それは疑う余地がない。ミニマムなサイズだって、女子としては決定的な欠点というわけでもない。なので、クラスが変わるたびに、かならず告白する勇者が出てくる。

で、見事に玉砕した勇者はみなこう言うのだ。

『あれ、なに?』

3年間同じクラスをやつていれば、そういうイベントも複数回目撃する。

なまじ成績だけは化物みたいにいいため、言動の謎い感じがいつそう強調される。鵜野森はそういうキャラだった。なんか高校入試の模試で全国ランキング入ったらしいからね、この子……。

「やめとけて、家出なんて」

「でも、問題が発生した」

「人の話聞けよ……」

鵜野森は、それもある、とうなずいたあと、おもむろに言った。

「ひとりでは、なにもできない」

「……」

「私は、なにもできなかった」

……なんで出かける前に気づけなかったかなあ、それ。

この子、ほんとに頭いいのかな？　いま俺、ちよつとこいつバカなんじゃないかなって
思ってるところなんだけど。

「そしたら、はしもとがいた」

「おい」

「ラッキー」

「じゃねえだろ！」

電車内ということもあって、押し殺した声ではあるが、強めに言った。

「……？」

きよとんとした顔で俺を見る鶴野森。

なにその顔。腹立つくらいかわいいんだけど。ここで小学校のときのうさぎの飼育当番だった記憶が蘇ってくるのはなぜだ。

「はしもとはどこ行くの。学校？」

「卒業したなあ」

「じゃあ戦地？」

「日本に軍隊はない。危ない発言はやめろ」

「じゃあどこに行くっていうの」

なぜキレる。

「30万円ある」

「それさっきも聞いた」

「15万円あげる」

「怖えよ！ ひさしぶりにあった同じクラスの女子から15万もらって俺はなにすりゃいいんだよ！」

「駆け落ち」

「ああああ!!」

俺は頭をかきむしった。

話がまったく通じない！ 日本語以外なにも通じてない！

駆け落ち！ なんで！ 意味がわからない！ こいつの頭のなかにはなにに入ってるの？
砂糖？ スパイス？ なにか素敵なもの？ 素敵さどこ？ ダークマターとかじゃないの？

「ところで」

「今度はなんだよ！」

ぎゅるるる。すげえ音が響いた。

「おなかすいた」

「……」

「カレー食べたい」

もういい。こいつとはしゃべらない。次の駅で下りる。

などと思っていたときが、俺にもありました。

なのに。

ああなのに。俺はなぜ。

「ほらよ」

「ありがとう」

鵜野森は、手に持っていたスマホをしまつて、俺が買ってきたソフトクリームを受取った。

コンビニの店頭である。ベンチがあるので、とりあえず座ることにした。

あのあとである。

鵜野森は、いまいじっているのとは別に持っているらしい、スマホより一回り大きい、いわゆるタブレットと呼ばれる端末を取り出して、俺に見せてきた。画像検索の結果らしいそこには、カレーの写真が大量に並んでいた。そこで俺は思考能力を失った。途中下車する鵜野森のあとをふらふらとついていき、気がついたらカレーを貪っていた。もちろんカバンは俺が持っていた。

うまかったかかって？

そりやもう！写真で見るとよりさらにやばかったよ。注文してから2分と待たずに出てきたカレーは、味はクツン濃厚、上に乗った肉も味付け濃いめで脂たつぷりの豚バラ。卵が異様なコクとまるやかさを全体に与えていて、史上最強のジャンクフードって感じだった。食欲を刺激すること以外にも考えてない狂気の一品だ。

食欲が満たされた幸福感とは裏腹に、俺はわけのわからない敗北感に苛まれていた。よくわからないが、確実に鶉野森のペースに巻き込まれている。

「おなかでちゃった」

隣の鶉野森は、セーターをめくりあげておなかをさすっている。その下は薄手の服らしく、おなかがぼっこりと出ているのが明確に目視できる。

このちっこい鶉野森の体のどこに、俺と同じ量のカレーが入ったのか。ミステリーとって差し支えない事態だったが、ちゃんと胃に入ったらしい。

しかしなんだろう、なんか見ちゃいけないものを見ている気がする。なぜめくりあげた。元同級生がぼっこりふくらんだおなかを見せつけてくる。

コンビニの店頭にいるのは、あまりに濃かったカレーの副作用で、死ぬほど甘いもの食いたくなったからである。そのタイミングで、駅近くの某コンビニが目に入ってしまった。で、動く気しなくなった。

時刻は昼前。朝よりはだいぶ暖かくなった。

コンビニは、幅の広い国道から少し裏に入ったところにある。店の前は、住宅街で、あまり人通りは多くない。

「あ、お金」

鶴野森が言った。

「あいよ」

レシートを渡す。11時45分。ソフトクリームが2個。

「はい」

鶴野森が自分のPASMOを俺の額に当てる。

「なんのつもりだ」

「読み取って」

「……」

デコピンしてやろうか。

もちろん現金でもらった。

二人して無心にソフトクリームをなめる。

鶴野森は、ぼけーっと空を見上げている。

つられて俺も空を見る。

2階の看板が大きくはみだしている。ステーキ屋らしい。どうしてステーキ屋さんは牛さんに自分を食べさせるの。そういうのよくない。

地元よりも、少し空が白い気がする。こんな場所だ。排ガスも多いだろう。空気がきれ

いとはいえない。

公園で出くわしたときもそうだった。鵜野森は、空を見ている。それは、必然的に中学の教室を思い出させる。

首を軽く振って、記憶を追い払う。

「はしもとは、どこに行くの」

空を見上げたままで、鵜野森が言った。

「さつき、答えてくれてなかった」

「……」

「疎開？」

なぜそうなる。

地元にいれば浴びるほどキャベツ食えるだろ。ちょうどシーズンだよいま。

「……」

答える義理はなかった。

むしろ、適当なこと言って、ここで別ればいいのだ。

なのに、俺は、

「旅行」

そう、バカ正直に答えていた。

「どこに？」

「決めてない」

「じゃあ」

鵜野森が俺を見て言った。

「駆け落ち」

「……」

少し、いらっとした。思いつきで言っていることでもないし、そこにいつさいの真実味がない。バカにされていると思えてしまう。

話を通じる相手じゃない。それはわかっている。

けれど、まったく通じない相手でもない。

そう思ったがっている自分に気づいた。それがどれだけ自分にとって都合のいい妄想か知っていて、なお、俺は……。

気がつくくと、鵜野森が、俺の腕に両手を乗せて、顔を覗き込んでいた。

近い。

息がかかるほどでは言わない。それでも、手を伸ばせば簡単に触れられてしまう距離だ。

ようやく気づく。

鵜野森の顔は、中学生のものじゃない。

輪郭は丸い。鼻だつて低い。

けれど、こんな複雑な表情を、中学生は、きっと、しない――。

「なんだよ」

自分の感情をごまかすように俺は言った。

「3年、たった」

「……」

「はしもとは、もう、かなしくない？」

どこか眠たそうな、半開きの目。

その目をまっすぐに俺に向けて、鵜野森は、俺の古傷を抉った。

3年前の4月21日のことだ。

なぜ日付まで正確に記憶しているかというと、それが父親の命日の4日後であり、かつ

俺の誕生日でもあるからだ。

忌引で20日まで休んでいた俺は、21日から学校に出た。しかたのないこととはいえ、クラスの連中は微妙な空気だった。

ご丁寧にもその日、誕生日を理由にあまり好きじゃなかった数学の教師に当てられた。問題には、答えられなかった。放課後は担任に呼び出されて、あれこれ聞かれた。いまにして思えば、あれは俺のことを気にかけてくれていたのだと思う。が、言葉はまったく俺の内側には入ってこなかった。自分以外のすべての人間と自分のあいだに、透明な膜があるような感じで、においや湿度が失われているような気がした。

教室に戻ったのはなぜだったのか。

ああ、そうだ。数学の教科書だ。ふだんなら置いていくのに、宿題があった。授業での失態もあって、忘れるわけにはいかなかった。

担任の話は意外に長くて、職員室から教室に向かう廊下では、だれとも会わなかった。部活の連中はまさに活動本番の時間帯だし、居残ってしゃべっている連中だつていいかげんいなくなる頃合いだ。昼というにはどこことなく暮色がただよっている。夕方というには空は青い。自分にとって特別だという意外になんの意味もない日、そして半端な時間。

教室が無人であることを疑わずに、俺は教室のドアを開けた。

西日が差していた。

窓際の席に、金色があった。

輪郭が曖昧だと思ったのは、鶴野森の金髪が光に透けていたせいだ。

「……」

なにも話すつもりはなかった。

仮にそのつもりがあったとしても、うまく言葉は出てこなかったに違いない。

正直に言うなら、見とれた。

逆光のなかに浮かび上がる姿は、どこか浮世離れして見えた。

窓の外を眺めていたらしい鶴野森は、俺の存在に気づくと、ちらりとこちらを見たが、すぐにまた、窓の外に視線を移した。

そういう関係だ。

教室のまんなかあたりにある自分の席から、数学の教科書を取り出す。

用事は済んだ。

自分の行動のすべてに理屈をつけられるとは思わない。けれど、できれば理由のない行動はしたくない。そういう気分はかなり昔からあった。だから、このときの俺はきつとなにかがおかしかったのだ。

あるいは、気になったのかもしれない。

教室の窓から見えるのは、どうってことのない田舎の景色だ。畑があつて、まばらに家があつて、道路には車が走っている。たまに農耕車が走っているのが珍しいくらいだ。そこに、なんの見るべきものがあるのだろうか。

「なに見てるんだ、鵜野森」

話しかけた。

鵜野森は、こちらを振り返らずに、

「空」

そう答えた。

「なんかあるのか」

「なにもないがある」

「……」

なに言つてんだかわからない。

鵜野森がわけわからないのは、いまに始まつたことではない。

「なにもないから、ぜんぶ」

「……そうか」

わからない。まるでわからない。

話しかけたはいいいものの、会話が成立しない。

これは逃げるしかない。そう思ったとき、鶴野森がこちらを振り返った。

まるで、不思議なものを見るような、驚いた顔をしていた。

「はしもとも、みる？」

「なにをだよ」

「空」

つきあう義理はない。関わりたい理由もない。逃げる理由ならいくらでもある。

それなのに俺は、吸い寄せられるように窓に近づいていた。

座席にして4つ分。

それが、俺が、自分と鶴野森のあいだに設定した距離だった。

なんとなく落ち着かない他人の席に座り、窓の外を見た。

別になにもない。

空はわずかに夕方の気配をただよわせている。雲がない。曖昧な水色。水蒸気が地上と

空のあいだに充滿している。距離感のないのっぺりとした空だ。

それは、いやおうなしに数日前の空を思い起こさせた。

魂なんて信じない。人は、死ねばそれまでだ。

だから親父はもうどこにもいない。なのに、存在だけがここにある。

サマルカンドの青が見たい。

あるとき、親父はそう言った。モルヒネで曖昧な意識のなか、たまに一瞬、意識が清明に戻ったように見えるときがある。親父は、病床上半身を起こして、遠くをしっかりと見据えた目でそう言った。

書斎にある親父の本にはほとんど興味がなかった。ただ、その言葉には聞き覚えがあった。本のなかでもとびきり大判の写真集を見せられたことがある。

複雑な模様を描く、緑とも青ともつかない、該当する色の名前が思い浮かばないような鮮やかなタイルをまとった建物。そしてその背景には、信じられないくらい純度の青空が広がっていた。

サマルカンドブルー。

そんな言葉を知ったのは、後年になってからのことだ。

言葉数の少ない人だった。わけても、愚痴や言い訳のたぐいをほとんどしない人だった。そんな人が、意味もなく死んだ。

運命なんて言葉は信じない。もしその言葉に意味があるとするのなら、それは理不尽の

別の名前ではない。

あんな空ではなかったはずだ。

こんな空ではなかったはずだ。

もし、親父が上っていくのだとしたら、あの写真集のような、純粋な空でなければならぬ。

「かなしい」

鵜野森が、とつぜん言った。

同じクラスの女子よりもよほど幼く聞こえるその声。そんなに大きくないはずのその声は、なぜかまっすぐに俺の耳に届いた。

「さびしい。くるしい。つらい。これは、わたしの仮説」

「……」

こんな声で話すのか。

俺はどこか、呆けたような顔をしていたと思う。そんな顔で、空を見たままの鵜野森の横顔を見ていた。

「それは、ないことになってる。けど、ある。どこに行ったのか。それは、空」

「……」

「ひとりで立って、上を見る。空がある。なにもない。だから、ひとりの、自分のすべてを預けられる。拒めない。なにもないから。だから」

鵜野森と同じ角度で空を見上げる。

昼よりも黄色みがかった太陽が、春霞の向こうにじんできている。

「だから、空は、青い」

それは、とうとつに、痙攣的に訪れた。まるで殺意と似たようなやりかたで、悲しみの発作に襲われた。鵜野森に俺の事情は関係ない。まして鵜野森とは会話すらまともにしたことがない。ここでさらけ出すことになんの意味もない。それどころかマイナスだ。愚かしく、恥ずかしく、はた迷惑で、醜悪だ。

なのに俺は、まんまとそいつの支配を許した。

「なんでだ……なんでなんだ……！」

言葉を止めようとすれば、その激情は別のかたちになってあふれる。

俺は、まともにつきあいのなかった同じクラスの女子の前で、泣いた。

まあ、そういう話である。

その後、少し落ち着いた俺は、鵜野森を残して、無言で教室を出た。

あれから3年が経過して、俺はもうじき19歳になる。自分のなかでは、整理はついている。たぶんあれは、だれでもよかったのだ。母ちゃんの前では泣けなかった。ひとりであるときは、感情を動かすメカニズムが錆びついたように無痛覚になっていた。ほんの小さなトリガーで、俺の涙腺は壊れる状態にあった。それだけのことだと思う。

ただ、鵜野森にどう思われているかについては、話が別だ。

あのあと、教室で俺の話題がまったく出なかったことから考えても、鵜野森がだれかにそれを話したとは思わない。そういうタイプでもないと思う。

しかし、肯定的に受け止められるはずがない。こういうことに肉体は関係ないとはいえ、よりによって、クラスでもいちばん小さい女子の前で、いちばん大きな男、しかも大人びているを通り越しておっさんくさいとまで言われていた俺がぼろぼろ泣いたのだ。俺なら引くね。

後悔してももう遅い。俺は選択を誤った。どこでだ。カレーか。カレーが悪いのか。

ところで鵜野森だが、人をこれだけの混乱に陥れておいて、自分はまたぼんやりと空を見ている。

「……笑え」

「？」

「笑いたきゃ、笑え」

「なに」

鵜野森は、眉根を寄せて、唇をへの字にして首をこてんとかしげる。だからそれやめろ。腹立つくらいかわいいから。

「どう考えたって最悪だろ。あんな、あんなの……」

「……」

鵜野森の顔が見れない。いままでの雰囲気豹変して、ガチ泣きが許されるのは5歳までだよねーとか言い出したらどうしよう。いっそ、そうしてくれたほうがかえって救いがある気までしてきた。

「はしもとは、人間」

「……」

「人間には、喜怒哀楽がある」

「……」

「よって、はしもとも、泣く。なんか変？」

「変って……俺、男だぞ？」

「もし、すべての男が泣かないのであれば、男には、涙腺がない可能性がある。でも、ある。よって、男も泣く可能性がある。物理反射的なものであれ、情緒的なものであれ」

「いや、そういうんじゃないかな」

「はしもとが、人間の男性でない場合、この仮説は崩れる」

「……」

すげえ。

圧倒的に話を通じねえ。

なんだろう。こいつの頭のなか、まじでどうなってるだろう。カレーでも入ってるか。スタミナ、ナマ、ルー多めとかの。

とりあえずわかったことがある。俺の3年間の煩悶は、ほぼ無意味だった。呆れているとか、陰で嘲笑しているとか、そういう俺のいやな想像を、鶴野森は、はるかに斜め下の方向で越えていた。いやもう、上か下かすらわからない。

平日の昼下がり。

商店街はめっちゃ人出が多い。地元の3ヶ月分くらいの人間を見ている気がする。

あいかわらず、鶴野森のカバンは俺が持っている。

この駅の近辺は、構造がちよつと変わっている。私鉄とJRの乗換駅なのだが、駅はやや離れた場所にある。さっきカレーを食ったのはJRの駅ビルのほう。そこから私鉄の駅までは徒歩5分くらいで、そのあいだの道路が商店街になっているのである。

鶴野森はうろろとあちこちの店頭やらなんやらを覗き込んで、落ち着きがない。

「でっけえやかん」

「そうだな」

「ぎょうざ」

「そうだな」

「ねことわかいせよ」

「そうだな……」

俺はといえば、完全に気力が抜けていた。てゆうかこの看板、ほんとに「ネコ」って書き換えるバカいたのか。あとけつこう意外なのが、こいついちいちそういうの写真に撮るのな。

「はしもと」

「なんだ」

「でかい」

「そういうおまえは小さいな」

約40センチの身長差は健在である。中学のころは、わざわざ隣に立つようなイベントもなかったから、いまさらのように実感してる感じもある。

俺も平均よりは高いほうだが、185センチという身長は微妙なところで、俺と似たような身長のやつを見かけることはある。その程度の俺でも、たまに「見られてるな」という感じを覚える。

しかし鵜野森はやばい。

もう、はつきりと振り返って見られるレベル。

まあ、髪からして完全に浮いてるからなあ……。

「おまえ、見られたりするの疲れない？」

「なれた」

「……あー」

「なれるしかない。自分のことは、人型の、めずらしい動物だと思いうことにしてる」

そうとでも思わなきゃやってらんないってことか。よほどなんだろな。美少女であることもメリットだけではないらしい。このちっこさを考えると、誘拐の心配すらありそう

である。

幅の狭い商店街を抜けると、少し広い空間に出た。JRのと比較するとやや小ぶりな駅ビルがあつて、そのあたりだけ道幅がけっこう広くなっている。いちおう車道ではあるが、実際には歩行者が縦横無尽に歩く無法地帯になっているようだった。

鵜野森が俺の横を離れて、とてとてどこかへ向かう。

目で追っていると、自販機の前に立った。

しばらく、自販機 vs 鵜野森の構図が続いたが、やがてまた、とてとて俺のもとへ戻ってきた。

「どうした」

「おかねがない」

「30万円あるんだろ。よかつたな、2000本くらい買えるぞ」

「そういうのじゃない」

むっとした表情を浮かべた。こいつほんとにいちいちかわいいな……。

「財布、カバンのなか」

「ついかPASMOM使えんだろ。駅の近くなんだから」

てゆうか俺も喉かわいてきた。ソフトクリームごときでは、あのカレーの強さは中和し

きれていなかった。

自販機の前まで行つて、品定めをする。がまあ、いつものごとく缶コーヒーだ。このへんもおっさんくさいと言われる要因なのだろうが、俺は缶コーヒーに関して是一家言ある。なんなら15分くらいは語れるが、どこにもそんな需要はない。最近は微糖がアツい。各メーカー、自然な甘みをめざしてしのぎを削っている。

「はしもと、でかい。じゃま」

「あ、悪い」

がこんと落ちてきた缶コーヒーを取り出して、よける。

しかし鶴野森は、やや離れた位置から自販機を見ている。

「買うんだろ？」

「あまりに近いと、高い位置の商品が、見えない」

「……」

衝撃の事実だ。

ためしに、鶴野森の横に立って、頭が同じ高さになるように屈んでみた。

「ほんとだ……」

「背が低いと、それだけで、生きづらいときがある」

結局鶉野森は、なんかゼリーが入ってて20回くらい振ってねみたいなイロモノ的なやつを買った。

周囲を見回すと、役に立ってるんだかどうか謎な、中途半端な長さのガードレールがあった。

「あそこで飲むか」

ガードレールに腰を落ち着ける。

が、鶉野森は、ジュースを振りながらガードレールを凝視している。

「腰が届かない」

「オウ……」

「立ったままでいい」

一緒に行動しているだけでカルチャーショックである。

「いち、にー、さーん、よーん」

律儀に数えながらジュースを振る鶉野森。その速度では混ざらないと思う。そしてその緩慢な動きでもほっぺたが微妙に揺れているのはなぜなんだろう。

二人して並んでジュースを飲む。

「20歳になったら」

脈絡なく鵜野森が言った。

「お酒を飲んで、タバコを吸おうと思う」

「……はあ」

「とうぜん、年齢確認される」

「されるだろうなあ……」

「そこで、身分証明書を出す」

「……」

お姉ちゃんのやつ持ってきてちゃだめだよ、とか言われる未来が見えた。

「相手は、驚く」

「……」

「ちよつとした、社会への復讐」

「ほどほどにな」

平和だ。

俺たちからいちばん近い距離にいるのは、道路の反対側のばーさん二人連れた。そのうちの一人が連れている柴犬が大あくびをしている。気温は20度くらいだろうか。芝生に寝転がるなら、最高の陽気とっていい。

が、俺の内面はそこまで平和でもない。

実のところ、今日一日くらいなら鵜野森につきあってもいいかな、という気にはなっている。なんだかんだでこいつはかわいい。恋愛の対象になるかといったら極めて厳しいが、なんかあれだ、姪とかいたらこんな感じなのかなという気がするが、こいつは同級生だ。気は確かか俺。

それ以上に、こいつに興味を持っている自分がいる。

話を通じない。しかしそのことは、鵜野森が俺の理解できない精神を持っているということにはならない。ただ、目線が違うのだ。角度が違う。さっきの自販機のように。俺から見える世界と、なにか別のものを鵜野森は見ている。

けれど、わだかまりがある。

あれは、鵜野森にとつては、どうでもいいことだったのだろうか。

鵜野森は、ガードレールに体重を預けて、空を見ていた。

まただ。

「おまえ、よく空見てるよな」

鵜野森が俺を見た。そこに別段の表情はない。しいて言うなら眠そうだ。その顔のまま、鵜野森はこくんとうなずいた。

「……」

俺は、鵜野森にないを言わせたいのか。

わざわざ自分から関係のある話題を振って。まるで、鵜野森がなにか意味のある返答をしてくれると期待しているみたいに。

バカすぎる。なんなら最悪だ。

缶コーヒーをひとくち飲んだ。この商品をはじめてだったが、人工甘味料の風味が強すぎる。失敗だ。

「わたし、おかしいから」

空に視線を戻して、鵜野森が言った。

「中学校に入るまで、学校がわからなかった。勉強は、なんでするんだろう。だって、教科書に書いてある。見れば、わかる。だから、意味を探した。それで、集まることに意味があるんだろう、そう思った」

ある意味では、そうだろう。

「でも、そしたら、今度は、別のわからないのが、出てきた」

「なんだ」

「感情」

端的に、鶴野森は言った。

「人は、ひとりで完結してる。生命は、お金がこれを保証する。ごはん食べれる。お風呂入れる。なら、なぜ人は、笑ったり、怒ったり、泣いたりするんだろう。意味がない。無駄」

「……」

「それで、人間が関わるものが、だめになった」

「どういうことだ？」

「ぜんぶ。家も、車も、スーパーム、いやになった。どんなに無機的に見えるものにも、その裏側には、感情がある。なんか、フジツボみたいだって思った。だから、空」

こいつには、通訳が必要なのではないだろうか。しかしそんな便利なものはいないから、俺は自力で聞くしかない。

「空が、どうしたって」

「なにもない」

「……」

「人間が、叫んでも、苦しんでも、空は関係ない。人間がわからない、と思ったら、対話の相手は、空しかなかった。そうして、空を見てると、わたしにも、さびしいとか、そう

いうのがあるんだなって、わかった。ぼんやりと。こんな空みたいに」

その言葉は、否応なしに、あのときの鵜野森の言葉と重なる。

ひよっとしたら、と俺は思う。

鵜野森は、さつきコンビニの前で俺にした質問の続きを話しているのではないだろうか。

「そしたら、はしもとが、泣いた」

缶コーヒーを持つ手がびくっと震えたのが自分でもわかった。

なんでもないふりというのは、どうすればいいんだったか。

そんなことすらわからなくなって、俺はただ黙ってうつむいている。

「ねことわかいせよ」

「……は？」

あまりに突拍子もない発言に、つい顔が上がる。

鵜野森は、俺の反応など関係ないかのように続ける。

「不思議だった。高校に行ってから、ずっと考えてた。空を見ながら。はしもとが泣いて、それは、わたしのあまり好きじゃない、感情というものだったのに、でも、いやじゃなかった。それが、不思議だった」

「……わかったのか」

ふるふる。鵜野森は首を横に振る。

「でも、わたしはきつと、あのとき、感情というものと、和解した」

「俺は猫じゃねえぞ」

「こんなでかいねこはいない」

遠くで、救急車か消防車か、どっちか忘れたけど、サイレンの音がした。

ここには、別に特別なものはなにもない。どこにでもあるような駅。雑多な商店街。車がバツクするときの警告音。少し離れた場所にあるドーナツ店からだよってくる油のにおい。じーさんの運転するスクーター。そんなものに囲まれて、ここは、日常だ。その日常のまんなかに、ぼっかりと、俺と鵜野森だけが浮いている。

俺はスマホを取り出した。

例の空の写真の人のアカウントを表示して、鵜野森に見せる。

向かい側から覗き込んだ鵜野森は、しばらくその画像をじっと見ていたが、やがて、顔を上げて、

「なに？」

そうつぶやいた。

「旅行に行くって言ったる、俺」

「うん」

「朝、その画像を見たんだ。それで、まあ、わりと発作的なんだけど、その空を探しに行こうと思った」

「……」

「鵜野森ほどじゃないが、実は俺にも15万円ある」

「でも、これ」

「ん？」

「でも、これ」

「……」

なんで二度言った。

「……なんの情報も、ない。空と、あとは電線だけ」

「わかってる」

「見つかるはず、ない」

「わかってるって。あくまで気分的なもので、だから……つまり……」

ひよっとしたら、だいぶ恥ずかしいことを言ってるんじゃないかと思えてきた。それをごまかすように、俺は顔を逸して言った。

「俺が見つけたと思ったら、それがそうなんだろ」

「……」

鵜野森は、なにやらぼかんとした顔で俺を見ていた。

やらかした、かもしれない。

今日一日で、俺はたぶん中学校の3年間より多くのやりとりを鵜野森とした。その結果わかったことだが、こいつは、表情に起伏がない。明確に顔に出るのは、なんか不満なことがあったときと、わからないことが出たときだ。

それがここまで呆気にとられたような顔をしているということは、これは、相当に呆れているということだろう。俺は、どうしてもこいつの前では黒歴史を量産する運命にあるのか。

「わけわかんないよな。聞かなかったことにしてくれ」

「わたしも探す」

「え」

思いがけない言葉が聞こえた。

「わたしも、いっしょに、探す」

つぎはーかみおーかー、かみおーかーにとまります。

母音が無駄に連続する駅名を車掌がアナウンスする。

都心部が近くなっているせいか、車内はそれなりに混んでいる。

そして俺は、やっちゃまった、と思っていた。

言うまでもなく隣には、がんばってつり革につかまっている鵜野森がいる。カバンはあ
いかわらず俺が持っている。ほんとになに入っただよこの重量。スペース効率からいっ
たら、中身捨てて鵜野森入れて運んだほうが絶対に早いってこれ。

下りを選ぶべきだったのだ。なに食わぬ顔して地元に戻る電車に乗ればよかった。

だってさ、俺はあてどのない旅に出ようとしてるわけだろ。鵜野森は家出だろ。

期せずして、駆け落ち状況が成立してしまっている。二人ともけっこうな金持ってるあ
たりがなおタチが悪い。

いや、いまからでも遅くはない。

「冷静に考えてみるとだ」

「うううん」

力が入っているせいかな、鵜野森の返事がちょっとおかしい。

こいつほんとに3年間、電車通学してたんだよな？ まあ、行きに関しては、始発駅から、1本待てば座れるという保証はあるんだが……。

「空を探すのに、都心方向に向かうのはおかしいとは思わないか。俺らの地元のほうが、よっぽど空は広いし、空気だってきれいだよ」

「や」

1文字で切って捨てられた。

「家から、離れたい」

そうだった。こいつはそもそも家出してきたんだった。なんかあれかな。家出共謀罪とかそういうのないよな？ それ以前にこいつはまちがいがなく18歳以上で、自分の行動には責任を取れる年齢のはずなんだけど、どうしてもそう思えない。

「なんで家出なんかしたんだよ」

「くつした」

「そうじゃなくて」

いまとなつては、鵜野森がそこまでのアホだとは思えない。別の理由があるのだと考えるのが自然だ。

「言わない」

「……」

「くすぐられても、ぜったいに、言わない」

こいつの弱点はそれか。

くすぐったらどうなるんだろう。

なぜか一足飛びに事後の鵜野森の映像が浮かんだ。くってっとなつて、自分の金髪に埋もれて、しどけなくベッドに横たわっている姿だ。足のサイズとか小さいんだろうなあ。

やばい。謎の破壊力ある。なぜ裸足設定にしたよ俺。

「だいたいさ、一人で行動するなら、ほんとに適当に行動してもいいよ。だれにも迷惑かからないんだから。でも、二人だとそういうわけにもいかないだろ？」

ここには、宿泊とかの絡みもある。俺ひとりなら、ネカフェでもどこでもいい。けど鵜野森と一緒にだとそうはいかない。

え、待って。俺、鵜野森と一緒に宿泊するの？

ツインでつて頼んだのに、宿の勘違いでダブルになって「どうしよう」「いっしょに寝ればいい」とかなくて、パニックになるの？ 風呂上がりにはバスタオル一枚で出てきた鵜野森を見て罪悪感と欲望のはざままで汚いバタフライとかするの？

いえ。なんでもないです。シングル2部屋にすればいいだけですよね。

「いい。勝手にについてく」

「けどさ」

「はしもとは、めんどくさい」

なぜここまで言われなければならぬのか。

「おまえがついてきたいとか言わなければよかった」

「空の写真を見せたのは、はしもとのほう」

「……」

「……」

息詰まる責任転嫁合戦が始まった。

交錯する視線。

てゆうか、鶴野森、まじでなに考えてるのかまったく顔からはわからない。変顔しても全スルーされる感じがある。

勝負になる以前に、試合になつてない。

ため息をついて言った。

「……やっぱまずいだろ。親の許可もなしに」

「はしもとは、ばかなの」

「なんだコラてめえ」

「家出だから、許可、あるわけない」

「だから言ってるんだが……」

「わたしは、自由」

遠いところを見るような目になって、鵜野森がつぶやいた。

こいつ、自由の意味を明確に履き間違えている。

「俺は男で、おまえは女だぞ」

「逆だったら、可愛い」

そんな話はしてねえよ。怖いよ。なんで入れ替えたんだよ。

やっぱだめか。全部説明しないとだめなのか。

「……その、なんだ。まちがいかあつたら、困るだろ」

「……」

鵜野森が俺を不思議そうに見上げる。

そのとき、車内アナウンスが流れた。

『前方赤信号のため停車いたします。おつかまりください』

それとともに、けっこうな慣性が働いた。車内がざわつく。

ぼすんと、鵜野森が慣性に流されるままに俺に倒れ込んできた。

「平気か、鵜野森」

「もごもご」

倒れ込んできたというか、抱きついていてる。なので、そのまましゃべるともごもごとなる。

「……」

つむじ見える。

どういふことだ。

てゆうかこの金髪なんだよ。人間の髪か。いや髪だが。身長差のせいで、顔の至近距離に鵜野森の頭頂部があるのだ。なんだこれ。触りたい。あとなんかほんわりとフローラル系の香りがしてきた。このまま首を無理な角度で傾ければ、俺は鵜野森の頭頂部に顔突っ込むことができる。

数秒の間に超速で童貞みたいな思考が脳内に炸裂した。

電車が止まった。

鵜野森が離れた。

顔色ひとつ変えていない。俺をじーっと見上げている。むしろ俺の顔色が変わりそうである。なんならちよつと心臓が変調をきたしている。

「なんだよ」

「はしもと、でけえ」

「……」

「背だけかと思ったら、なんか、ぜんぶでかい」

こんな、と言いつつ、腕を、俺に抱きついたかたちになっている。

なんか謎に恥ずかしい。やめてほしい。

『進行停止解除となりました。発車します。おつかまりください』

再びのアナウンス。

電車が動きはじめ。

「……いまのでわかったら」

「なにが」

「体格差。もし俺がその気になったら、鵜野森は危ない。俺が親だったら、自分の娘をそんな状況に置いとく気にはならないだろうし、相手の男の良識を疑う」

「その気になるの？」

「は？」

「わたし、こんなだけど」

「こんな、というのは外見のことだろう。」

「てゆうか……。」

俺は頭を抱えたい気分になった。こいつはわかっているのだろうか。自分の外見を。見られるような外見であるという自覚はあるようだが、どうも、自覚と客観と、なにかが食い違っているような気がする。少なくとも、こいつはただの珍獣ではない。

わからせたほうがいいのだろうか。

そのための方法は簡単に思いついた。が、それをするには勇気がいる。

「はしもとは、ちいさい子がいいの？」

「とんでもないことを言い出した。疑惑は晴らさなければならぬ。」

俺は、覚悟を決めて、鶴野森の頭に手を置いた。

ふわふわかつポリューミーなすばらしい感触がてのひらに伝わった。これまで、なで心地のいい動物のナンバーワンは俺のなかでは猫だったが、今日、そのランキングが覆った。やばいなにこれ。めっちゃなでたい。てゆうか、髪のなかに手つつこんでわしゃわしゃしたい。

「なんで、頭をつかむ」

「どうだ、いやだろう」

「……？」

眉根にシワを寄せて、まったくわからん、という顔をする鵜野森。

「女子が、親しくもない男子にされていやな行為ナンバーワン、頭をなでられる、だ」

「ふえ」

いやだからなに、その半端な返事。

俺は、手を離した。正直、名残惜しい。

「これでわかっただろ。俺は、鵜野森がいやがるような行動をいつでもすることもできる。鵜野森には自衛の手段があまりない。不公平だつてことだよ」

「はしもとは、前提が、まちがってる。別に、いやじゃない」

「……え」

まさかの返答に思考が止まる。

「次はーよこはまー」

流れてきた車内アナウンスに、鵜野森が反応して上のほうを見る。

中断した状態から、この話題を再開するのは、俺には荷が重い。

やがて、電車が止まる。この駅では、たくさんの人が下りる。

「下りる」

「お、おい」

「はしもとも、下りる」

そう言うのと、さっさとホームに出てしまった。あわてて俺も下りる。いったいなに考えてるんだ、こいつは。

横浜駅は、わりとなじみのある場所だ。

田舎の高校生といても、たまには来る。改札を出ると、とんでもない幅の東西自由通路がある。よそ見をしながら歩いていると、人にぶつかりそうなくらいには、たくさん人間が歩いている。

そんな場所を下りて、いま俺たちはなにをやっているかというところ、なぜか地下のバスのりばの待合室のベンチに座っている。教室くらいの広さで、コインロッカーやジュースの自販機などがある。そして、人がいない。

「食べれない」

隣に座っている鶴野森がつぶやいた。膝の上には、某シウマイ弁当が鎮座している。

鶴野森が下車した理由がこれだった。

あの量のカレーを2時間前に食ってもう弁当食えるのか、という疑問はあったが、とにかく座れる場所を探した結果、ここにたどりついた。横浜駅、想像以上に座れる場所がない。

「どこで、食べればいいのか」

「家で食べばいいだろ」

「腐る」

「本日中にお召し上がりくださいって、売店の人言ってただろ」

「はしもとは、細かい。あと家には帰らない」

「……」

ふと、俺はなにをやっているんだろうという疑問がわいてきた。

空を探しに行く。それが最初の目的だったはずだ。ずっと一緒かどうかはわからないが、鶴野森も賛同したはずである。なのに、現実には、意味もなくバスの待合室に座っており、鶴野森はうらめしげにシウマイ弁当を見つめている。

壁面にかかっている液晶モニタは、観光情報を流していた。空の旅は羽田から。沖縄のビーチ。そして北海道のスキー場。ここからバスに乗る人の大半は、すでに航空券の予約は終わっているはずで、あの映像には意味があるのだろうか。

気がつくのと、鵜野森も同じ映像を見ていた。

不思議なもので、こういう意識の空白ができるのと、鵜野森が、ほとんど交流のない、3年ぶりに会った人間だということに気づいてしまう。

俺はこいつのことをなにも知らない。どこに住んでいて、どんな家族構成で、なにを考えて、どうやって今日まで生きてきたのか。

まばたきの少ないその横顔は、人形めいて見える。

飛行機の窓から見下ろしたとおぼしき映像を見ながら、鵜野森が言った。

「はしもとは、なぜ、探そうと思ったの」

「ん？」

「空」

「……」

そう言われて、言葉に詰まった。

ひとことで言い表せるなら苦労はない。めったに思いつきでは行動しないからなおのこ

とだ。

たまたま手元にお金があつて、時間は売るほどあつて、そして空の写真を見た。あのときの空に似ていた。遠くに行きたくなつた。親父のことを思い出した。それらのすべてが理由であり、けれど、理由はもつと別にある気もする。

「大学に、合格したんだ」

「うん」

「でも、辞退した」

「……」

鵜野森が俺を見た。ぱちつと、一度、まばたきをした。

「バカなことをする、と思うよな。自分でもそう思う。そのために必死で勉強したのに」

「……」

「合格したときは、そりゃ嬉しかったよ。けど……」

「けど？」

なんとなく空を見上げる。あの合格発表のときとは似ても似つかない空を。

「……雪が降ってたんだ」

「あつたね」

「俺、わざわざ発表見に行ったからさ。帰り、とんでもないことになったけど」

季節外れの大雪なんて報道されていた。

合格発表があった校舎は古かった。

校門を出て、すぐに親にメッセージを送った。

そして、振り返った。

見慣れない校舎の屋根に、うつすらと雪が積もっていた。陰鬱な空。視界に舞う無数の雪片。

ここに、4年間通う。

そして、きつと就職する。実際にできるかどうかはともかく、そうなるべく努力はするだろう。

サマルカンド。

その言葉を、とうとつに思い出した。

見たこともない異国の地。そこには、ステップ気候の周縁部でしか見られない純粹な青空があるという。

あれが親父の最後の言葉だった。あれ以降、意識は混濁したままで、そのまま意識がなくなつて、死んだ。

いつか死ぬ。その思いは、いつも俺にあった。親父は40歳にも届かずに死んだ。自由になりたいというのとは違う。別に大学に通うこともいやではなかった。ただ、待つてくれ、と思った。もう少しだけでいい。俺に猶予をくれ、と思った。親父が見たかったもの、知りたかったこと、ほんとうに欲しかったもの。それに近づきたい。なんにも持ちたくない。

どこにも、所属したくない。
だから――。

うまく説明できたかはわからない。俺は、質問に対する直接の回答にはならないことを、鵜野森に話していた。

鵜野森は、相槌を打つでもない。眠そうに見える目で、まっすぐに俺を見て、話を聞いている。

「要するに、なんかもやもやしてたんだろ、いろいろと」

「わたしも、そう」

「ん？ どれが？」

鵜野森、主語とか目的語とかいろいろ抜ける。

「大学。合格したけど、行かなかった」

「……まじで？」

「まじ」

「併願とかじゃなくて？」

「ひとつしか受けてない」

いや待て。こいつの学校、県内でも有数の進学校だろ。

「ちなみに、どこって、聞いてもいいか？」

「それは」

そして、鵜野森の口から出てきた大学名を聞いたとき、俺は啞然とした。だれもが国内の最難関と認める国立大だったからだ。なんなら2度ばかり聞き返した。

ない。それはない。俺は、焦りのあまり検索してみた。

結果、あるにはあるらしい。毎年10人とかそんなレベルで。ただそれは、医学部とか外語大とか、特殊に専門性が高い領域の併願が絡む場合がほとんどらしく、つまり、常識的には、まずない。

「親は？ さすがに許さねえだろ、それは」

「……」

「鵜野森」

促すように、声をかける。

「だから、家出した」

「……」

「でも、くつしたもほんとう」

「いやもう、それどうでもいいから」

どうでもよくないなどと鵜野森は反論しているが無視だ。

そりゃ揉めるだろうよ。そこそこの公立大に引っかかっただけの俺とは違う。それでも、母ちゃんが反対したら考え直すだけの余地はあった。なんなら浪人してさらに上を目指す、という建前だつて成立する。

しかし鵜野森は……。

よくよく考えてみれば、靴下の穴を爆笑されるのは、ほのぼのエピソードでもある。関係の悪い親子でそういうやりとりは発生しないだろう。そうした関係性を維持しているとしても、なお揉める。鵜野森のやったことは、そういうことだ。

「驚いた？」

無表情で鵜野森が聞いてきた。

「驚くっつーか……引いた」

「わたし、とりえが、勉強と、顔しかない」

「充分だろ……」

「でも、背が低い。運動がだめ。愛想がない。生活がだめ」

「……」

「生きるのが、だめ」

重すぎる。

これはつまりあれだ。リアル極振り。それを人間に実装したらどうなるか、ということだ。まして、人間はキャラじゃない。食べて、飲み、寝て、排泄する。そして、懊悩する。つまり、生きている。

「わたし、なにもしてない。どこにもいない。与えられたから、勉強した。受験先が決められたから、受験した。わたし、どこにもいない。だから」

「……」

「わたし、消えてもいいのかわかって、そう思った」

次から次へと入線しては、どこかへと走り去っていくバス。外を歩くさまざまな人々。羽田から空の旅。雄大なゲレンデがあなたを待っています。オフシーズンにお得な沖縄。一度に何人となない人間を載せて移動する飛行機。その向こうにも人間がいる。無数の、そ

れこそフジツボみたいにびっしりと地表に張り付いている無数の人間たち。きつとそのだれもが——ひよっとしたら親ですら——鶉野森の孤独には気づかない。

人間には2種類ある。孤独を抱え込んでいる人間と、そうでない人間だ。

どちらかといえば寡黙で、ときに神経質にすら思える親父が、なぜあの騒々しい母ちゃんと結婚したのか謎だった。俺の見る限り、親父はひとりで過ごすことが好きな人間に思えたからだ。

『僕みたいな人種はね、放っておくと、すぐに薄暗い場所に入ろうとする。そこは、とても居心地がいい。けれど、あるとき気がつくんだ。そこでは自分は一人だと。だから、一を発したら、十くらい返ってくる人のほうがいい』

それを聞いた中学生のころ、親父がなにを言っているのかはよくわからなかった。

記憶の底に埋もれて、今日まで思い出すことすらなかったやりとりを、急に思い出す。そして、その意味が一瞬にして理解できてしまう。

こんなこともあるんだな。

「なあ鶉野森、エコロケーションって知ってるか」

俺は、親父の言葉を思い出しながら言った。

「反響定位。動物が音を発して反響を受信することで、自分や獲物の位置を特定する行

動」

さすがである。ふだんからそうやってきびきびしゃべってほしい。

「親父が言ってた。人間もそれをするって。なにかを発して、なにかが返ってくる。それ
でようやく、自分という存在を確信できる」

「……」

「俺は、鵜野森に会わなければ、たぶんいま、ここにはいない。これで鵜野森が消えてし
まったら、俺はとても困る」

「みんな、そう言う。消えていい人間なんていない、と」

「んな抽象的な話なんかしてねえよ。勝手に人巻き込んでさっさと消えるとか無責任にも
ほどがあるだろって話。あと荷物どうすりゃいいんだよ」

「にもつ」

鵜野森は、目をぱちぱちさせて俺を見る。

「おまえが消えても荷物は残るだろ」

「……」

ああ。

ようやくわかった。

「どうやら、少し腹が立っていたらしい。」

存在が中断されるということ。その圧倒的な理不尽さ。俺はそれを知っている。きっと、ふつうの人よりも、強く。

あるいは、昨日までの鵜野森なら消してもかまわなかっただろう。しかし今日の鵜野森はだめだ。わずか数時間分だけれど、鵜野森の荷物を俺は持ってしまった。荷物は、単独では存在していない。鵜野森の今日までの時間が、そこには入っている。俺は、それを持ってしまった。

「そういう、設定……」

「設定とかじゃねえ。荷物めっちゃここにあるだろ。バカでけえのが」

鵜野森は、なぜか驚いたような顔をしていた。眠そうな目が、少し開いている。こいつはときどきそんな顔で俺を見る。まるで、幽霊かなにかに出会ったかのように。

鵜野森が立ち上がる。

俺の前に立って、ややうつむいて、

「ありがとう」

そう言った。

そして、俺の右腕を両手で掴んで、引っ張った。

「行こう、はしもと」

「っておい。どこにだよ」

「どこか」

「ノープランかよ！」

細くて頼りない腕。小さな手。

本来なら、鵜野森の力では動くはずのない俺の腰が、見えない力に押されるように浮いた。

人間は、タンパク質や水や、そんなものでできている。食べものを食べて、カロリーを消費して生きる。人を動かすのは筋肉であり骨格であり血液だ。

もしそれ以外に人間を動かすものがあるとしたら、それはなんなのか。

俺は、鵜野森に手を引かれながら、そんなことを思っていた。

壁に寄りかかって、俺は鵜野森を待っていた。

建物も、バスのりばもどこまでも長い。右を見ても、左を見ても、視界の効く限りバス

停が無数に並んでいる気がする。

なんだろう、まあ衝動的にバスに乗ったはいいけど、あれ空港行きのリムジンバスの待合室だったよね。P A S M Oで乗れるのはじめて知ったわ。空港なんて来たのは修学旅行以来だ。

あきらかに普段着ではない服を着ている人たち。スーツ姿のリーマン。日本語ではない言語を声高に交わしつつ通過していく団体さん。すべての人に共通しているのは、なんらかの大荷物を抱えているということだ。

まあ俺も大荷物を抱えてはいるわけだが、中身がなんなのかはよくわからない。鵜野森がないこの隙に中身見てやろうかとも思ったが、うかつにばんつとか出てきたら、罪悪感でつぶれるかもしれないのでやめておく。シウマイ弁当が入っていることだけは確実にある。

リムジンバス、非日常感がすごかった。鵜野森いわく「遠足のバスのおい」だそうだが、それには納得した。シートなんかもふつうの路線バスとはぜんぜん違って座り心地がいい。高速に乗るのもおもしろかった。

とまあ、俺は楽しかったわけだが。

鵜野森の様子がおかしかった。

理由が判明するまでは、25分の時間が必要だった。

鵜野森が前方を注視したまま動かなくなった。

『どうした』

『やばい』

『なにがだよ』

『トイレ』

一瞬にして、旅情も非日常感もすべてが吹っ飛んだ。

『わたしはいま、後悔してる』

そりゃそうだろう。なぜ行っておかなかったという話だ。

『説明は、ちゃんと隅々まで読むべきだった』

そう言いつつ、鵜野森が示したスマホの画面。そこには小さなフロントでこう書かれていた。車両は予告なく変更する場合がございます、と。

つまり、鵜野森はバスに乗ったときから、この車両にはトイレがないという事実気づいていた。そしてそれは、鵜野森にとって想定外のことであったわけだ。

俺の知っている限り、女性は構造上、男性よりも我慢できる度合いが低いという。人がせっかくエモい感じで鵜野森につきあってもいいと思っていた矢先におもらしパッドエン

ドとかまじ勘弁である。

「我慢できそうか」

「だいじよぶ。……お、大きいほうだから……まだ……」

百年の恋も一瞬で冷める情報もたらされた。

あくまでこちらの勝手な思い込みで申し訳ないのだが、鵜野森、外見だけはほぼ天使なので、その口から大きいほうとか小さいほうとかさういう声に出されて聞かされたくない日本語を言っつてほしくなかった。なんならトイレ行かないのでは感まであったのに。

まあそんな顛末で、鵜野森はいまトイレで大きいほうをしています。

「……」

なにも考えていません。しいていうなら、あれだけ食ったら出るよなあくらい。

ろくでもない想像に至りそうになっていると、向こうからととと金色のものが歩いてきた。目立つなあいつ。つーか遠目に見たらまじで日本人に見えない。

無事俺の前までたどりついた鵜野森である。荷物はすべて俺が持っているが、さすがにスマホだけは携帯していて、手に握りしめている。やたらでかく見えるのは気のせいか。

「迷わなかったか」

「迷うはすがない。苦しい状況のなか、わたしは、必死で空港のトイレの位置を検索して

いた」

「ああ、うん、そうね……」

「生きててよかった」

万感の思いが込められた安堵の笑顔だった。

前後の事情を知らなければ、一発で恋に落ちていた可能性すらある。

「……よかったな」

力なく俺は相槌を打った。

空港に来たはいいが、別にやることはない。とはいえ、鶴野森にとってはすべてが珍し
いらしく、やたらあちこち行きたがる。いまは、江戸の町並みを模した商店街らしき施設
のなかを歩いている。

「おまえ、飛行機って乗ったことあんの」

「クアラルンプール」

「ちっ、海外かよ」

「あと東京タワー」

「それ飛行機関係なくない？」

「ちいさいころに来た。すごかった。東京で知ってるのは、受験した大学と、あと東京タワーだけ」

行動範囲の狭さが覗い知れる。てゆうか、一人で外出させられないもんな、これ。

そんな世間話めいたことをしているあいだにも、変な柄のTシャツとか、和紙柄の小物とか、そんなものに鶴野森はいちいち引つかかっている。

やがて、大きな吹き抜けのあるショッピングモール的な場所に出た。羽田空港すんげーな。なんでもあるぞ。コンビニも2軒ばかりあった気がするし。ユニクロもなかったけ。住めるんじゃないのこれ。

何軒か店を覗くともなしに覗く。ウインドウショッピングといえば聞こえはいいが、勝手にふらふらする鶴野森のあとをついていつていつてただけである。

やがて、規模の大きい土産物屋で、鶴野森が動かなくなった。

ニワトリの幼生体であるところの銘菓を見ている。

「はしもと、こいつ、まぬけな顔だ」

「おまえ、東京を代表する銘菓になんてことを……！」

「なんで、みんな上向いてる。下向いたら死ぬのか」

「そもそも生きてねえよ。あっちのサンプル見る。半分に分れてるだろ」

「内臓……」

「やめなさい」

「はしもと、こいつ、ひよこじゃなくて、オットセイなのでは」

「知らねえよメーカーに聞けよ」

銘菓オットセイとか死ぬほど売れなさそう。

「すいません」

「やめろ」

鵜野森が店員さんに声をかけそうになったので、反射的に頭をつかんだ。

「なにをする」

「おまえこそなにをする。店員さんだって忙しいんだ。わけのわからない質問で迷惑かけるんじゃないありません」

ああいいなあこれ。バスケットボールを片手でつかめる俺にとって、鵜野森の頭ははてしなくちょうどいいサイズだ。しかもなんかふわふわしてるしわさわわしてるし。

「てや」

ぺち。

頭に乗せられた俺の手を、気の抜けた掛け声とともに、鵜野森が叩いた。

一瞬の隙について、鵜野森が俺の手から逃げ出す。

鵜野森は、自分の頭を手で押さえつつ言った。

「はしもとは、なんでもやにやしてる」

「してない」

「してる」

はい。してました。

「おじさんみたい」

「ええ……」

「おじさんは、たいてい、わたしを見ると、そうなる」

「……」

死にたい。

まだしも欲情していたほうがましである。

肺腑を抉るダメージだけを残して、鵜野森はふらふらと移動する。手綱をつけてない犬の散歩のようだと思いつつあとをついていくと、とある場所で鵜野森が立ち止まった。

「ぬいぐるみか……」

柵には、所狭しと海棲哺乳類らしき白くてまるっこいぬいぐるみが並んでいる。

「なんだこいつ」

「しろたん」

早速、そのうちのひとつを手にとっていた鵜野森が秒で答えた。なんともいえないデザインだ。そのしろたんとやらいうやつに覆いかぶさるようにパンダが癒着している。

「なんでパンダに食われてんの？」

「食べてない。ここが口。ぱんだは、口あけてない」

「……」

確かにそうである。ギリシャ文字のオメガのような形をした口が別にある。

「じゃあなんなの」

交尾？

「だっこ」

そうかなあ。俺には交尾に見えるなあ。アザラシとパンダの禁断のキメラ生まれそう。

ナゼ、ツクツタ……オレノヨウナイキモノヲ……。

名前はアザラシか、パンザラシかで悩んでいると、ふと、鵜野森が、俺をじーっと見上げているのに気づいた。

ぬいぐるみという小道具ひとつでこれほど人は幼い雰囲気になる。似合すぎてて怖

い。誘拐されそう。むしろ俺がしそう。同い年の女子連れてて連れ回し犯で捕まる未来まで見えた。

「うちには、くまたろーがいる」

「だれだよ」

「ぬいぐるみ。でかい。これ持ってて」

「あ、はい」

なにが始まるんです？

交尾中のぬいぐるみを受け取って鵜野森を眺めていると、

「これくらい」

両手をめいっばい上に伸ばして、体全体を使って、そのシルエットを表現する。比較対象は俺。つまり俺の目の前で、鵜野森がなんか背伸びしたり腕振り回したりしてる。

「……」

なにこのいきもの。

かわいすぎて泣けてくる。ラジオ体操とかやらせたい。

「わかった？」

「微妙……?」

「ぬいぐるみ返して」

「はい」

なにこのやりとり。

鶴野森が微妙にドヤ顔してるのもよくわからない。

「それで」

「はい」

「でかいの、好き」

「そっかー」

「はしもとも、でかい。そこは、好き」

告白かな？

さすがにもうわかってきた。動揺すらしねえぞ俺は。

「家に、一体あってもいい」

「序数詞な」

「でも、相原が、それはだめだと」

「だからだれだよ……って、ああ、中3のときの」

いたいた。ひたき係の一人である。

こんなやつがどうやって学校生活を送っていたかというところ、なぜか周囲に常に女子がいるのだ。今週のひたき係は私ね、みたいなセリフを聞いたことがある。体操着を一人で着れないとかは、そのへんから出た噂だと思われる。

ひ、ひとりでできるよね？

「相原は、言った。あれは無害っぽく見えるけど、いざとなったら、ペニス生える、と」
「おい待ていまおまえなんつった」

「だから、近づくなかつた」

あ、いますれ違つたおっさんが怪訝そうな顔でこっち見てた。

「はしもとは、ペニス生える？」

「よし外に出よう」

俺は鵜野森の頭を掴んで、引きずるように店を出た。

「いたいいたい、はしもと、首がもげる」

「やかましい。キリキリ歩け」

周囲を見回す。階段へと続くあたりが人が少なそうである。

開きっぱなしになっている防火扉のようなものを抜けて、階段のある空間に入った。無

人である。フロアからは死角になっている。

そこで鵜野森を解放した。

「おまえなあ……」

「……」

鵜野森が頭を押さえて、恨めしげな顔で俺を見上げている。

「なんだよ」

「はしもとは、軽率に、わたしの頭をつかみすぎ」

「サイズと位置がちょうどいいんだよ」

「わたしは、はしもとのどこをつかめばいいの」

鵜野森が、俺の顔から徐々に視線を落としていく。やがて、ある場所で視線が止まった。

「どこ見てんだ」

「股間」

「やめなさい」

「つかめないのか」

人並みだよふざけんな。問答無用でふたたび頭を掴む。ついでに左右にシェイクする。

「やめ、やめ」

「女の子だから、そういうこと言うんじゃないやありません」

「おじさんっ、みたいっ、だ……っ」

「ようしわかったもう許さねえ」

「やめ、出る、あっ、出る……」

出てはまずい。なにが出るのかはわからないが。

手を離すと、鶴野森は頭を押さえながら、数歩後じさり、

「うううう」

俺を恨めしげに睨んで、なんか唸っている。

「はしもとは、へんたいだ」

「……」

「女子の頭をつかんで喜ぶ、へんたいだ」

どっと疲れた。

階段に座り込む。

言い訳する気も起きない。

鶴野森が近寄ってくる気配がしたので、顔を上げる。その瞬間、両手で頭を掴まれた。

「なにやってんだ」

「しかえし」

ところで。

階段に座っている俺の頭を掴むために、鵜野森が手を伸ばしている状況だと、わりと鵜野森の胴体が目の前にある。無防備にもほどがある。

「髪、ごわごわしてる」

鵜野森の声が頭上から降ってくる。

「カピバラみたい」

「……」

こいつ、ほんとうにわかってない。

あんな話題のあとに、こんなふうにぺたぺた触ってきて、それで男がなにも感じないとでも思っているのだろうか。俺がちよっと手を伸ばせば、鵜野森の自由を奪うことなんて簡単にできる。

それとも。

『別に、いやじゃない』

さっき、鵜野森が電車のなかで言ったセリフを思い出す。

そういうことなのだろうか。

たとえば、いま俺が、腕を伸ばし、鵜野森を抱き寄せても……。

「てや」

べち。

頭叩かれた。

べちべちべち。

繰り返し叩かれた。

「はしもとの頭、いい音する」

「や・め・ろ！」

手を振りのけて立ち上がる。

その俺を、鵜野森がじーっと見ている。

次の瞬間起きたことを、俺は一瞬、認識できなかつた。

「……なにやってる」

「だっこ」

頭が真っ白になった。

鵜野森が、俺に抱きついてる。

ばからしいことに、次に俺がしたことは、周囲に人がいないかどうかを確認すること

だった。もちろん、ここは死角だ。しかし、いつ階段を上ってくる人がいないとも限らない。

「やめろって」

「や」

軽いハグなどではない。両腕にしっかりと力を込めて、俺の胴体に手を回している。

鵜野森のやわらかい髪が俺の顔をくすぐる。

さっきの電車のなかでのアクシデントとは違う。

鵜野森が、自分の意志で俺に抱きついている。

そう思った瞬間、頭のなかでなにかが弾けた気がした。

「ごっごっしてる」

「……」

「わたしとは、ぜんぜん、ちがう」

もう、無理だ。

行き場のない俺の手が、鵜野森を求めて動いたときだった。

反響する声とともに、ばたばたと階段を下りる足音が聞こえてきた。

ぱっと、鵜野森が俺から離れる。

しばらくして、数人の若い女性の集団が、俺たちの横を通過していった。声が聞こえなくなるまで、俺は固まっていた。

静けさを取り戻した階段ホールで、俺はごついたため息をつきつつ、壁にもたれかかった。そのままずるとしゃがみこむ。

「おまえ、なんなんだよ……」

顔を手で覆う。上気しているのがはっきりと自覚できる。こんな顔は見られたくない。てゆうかいいかげん鎮まってくんねーかな、心臓。

「はしもとに、興味がある。……わたしと、ぜんぜんちがう。顔も、体も、声も、ぜんぶ」
「……興味があったら抱きつくのかよ」

「うん」

「うんって、おまえ……」

思わず顔を上げる。俺の顔に、鵜野森がそと触れる。

「何度も、思い出した。思い出しすぎて、すりきれた」

「だから、なにをだよ」

我知らずこぼれたいらだたしげな声にも、まったく躊躇した様子がなく、鵜野森が言う。「透明な、膜がある。わたしと、世界のあいだに。だれも、入ってこないはずだった。で

も、はしもとが入ってきた。あのとき。あの、教室で」

「……」

「空には、なにもないはずだった。でも、あるようになった。空を見るたびに、はしもとのことを考えるから。何回も、何回も、考えるから。返してって、思った。なにもない空を。空が埋まったら、もう飛べない。そしたら、歩くしかない。歩いて、歩いて……」

人のざわめきが聞こえる。ゲームかなにかの効果音のように。

なぜ俺はこんな場所にいるんだらうとか。

なぜ鶴野森は、こんな泣きそうな顔をしてるんだらうとか。

いろいろな思考が、まるでノイズみたいに頭のなかで反響して、やがてそれらのすべてがホワイトノイズみたいに混濁しつつ、俺の意識からフェードアウトしていき、ついには、

「やっと、追いついた」

鶴野森の声しか聞こえなくなる。

頬を包む鶴野森の体温。

またうるさくなってきた心音。

ようやく、見つけた。

なにを？

いままで、ずっと探していたものを。

たったの半日で？

時間は関係ない。

ここにあった。

ようやく、見つけた。

「あ」

鶴野森が、小さくつぶやいた。

スマホの着信音が流れてきた。

それは、俺のものではなかった。

「なんか、冷えてきたな」

「うん」

展望デッキから見る空は、アホみたいに広い。

あたりまえの話で、ここは空港だ。飛行機が離着陸する障害になるものがあっていいは

がない。

午後5時半。日は沈みきっていないが、どこか心細くなるような夜の気配が、ひたひたと空を浸しつつある。離陸の順番待ちなのだろうか、滑走路には何台かの飛行機が並んでいた。先頭の飛行機が、急に加速しはじめる。やがて、離陸。周囲に轟音が響く。

「電話、だれからだった」

「お母さん。ちようど、パートが終わって家に帰ってくるころ」

その後、電話は鳴っていない。鵜野森が、着信拒否にでもしたのだろうか。

展望デッキをぐるりと囲む高いフェンス。そのフェンスに手をかけて、鵜野森は飛行機の行方を追っている。

「はしもと」

「ん？」

「飛行機に乗ろう」

「絶対にやめとけ。どこ行く気だ」

「大東島」

「それだけはありえない」

「まだ、空、見つけてない」

「……言っただろ、俺がそうだと思うばそうなんだって」

「この空が、そうなの？」

「どうだろうな」

俺は、別のことを考えていた。

「……よく、旅行に行くんだよ。日帰りとか、泊りがけとか、まあいろいろ」

「大東島は」

「親戚でもいるのか……？」

「いない」

鵜野森の謎のこだわりがわからない。離島マニアなの？

「じゃあ、有馬温泉」

「せめてコンセプトは統一しよう？ な？」

「……」

なんで不満そうなんだよ。意味わかんねえな。

「一人で行くんだけどさ。やっぱ、知らない土地だと不安なんだよな。特にこんな感じの時間帯。火点し頃とか、黄昏時とか」

「黄昏時は、戌の刻。だから、もうちよつと遅い」

無駄に博識だな、こいつ。

「……夜じゃないの。怖くなるのって」

「夜になっちゃえば、そうでもない。家に帰りたいっていう不安と、遠くまで来たんだなっていう興奮が、同時にやってくる感じ」

「すこし、わかる気がする」

鵜野森が、俺の上着のはしっこを掴んでそう言った。

……無理。かわいい。

俺は、強靱な理性で自分を制御し、鵜野森の頭をつかんだ。

「なぜつかむ」

「変態だからだ」

「……」

下を向きかけた鵜野森の頭を、無理やり矯正する。なぜおまえはすぐにそうやって人の股間を凝視するの？ あと俺の理性は豆腐なの？

さらにいうと、ここにはけっこう人がいる。なんならちよつと周囲から見られてる気がする。

頭からは、手を離した。

「もう、おわり？」

「終わり」

終わらせないと、次のステップが始まってしまいそうな気がする。頭の次はどこだろう。おっぱい？

「がつんと、フェンスに頭を叩きつけた。」

「……じゃあ、こうする」

腕を掴まれた、と思ったら、手に、ひんやりとした感触があった。

「でけえ」

「……なにやってんだ」

「手をつないだ」

「……まあ、そうだな」

「うん」

鵜野森は、じっと俺を見て、

「不思議と、恥ずかしい」

「じゃあ、なんで人を凝視してんだよ」

「わからない」

鵜野森の目が、微妙に泳いでいる。なのに、かたくなにこちらを向くことをやめない。見るといふ意志を諦めようとはしない。分刻みで少しずつ暗くなっていく空の下でも、鵜野森の顔が少し赤くなっていることがわかった。

だめた。これはもう、俺が耐えられない。

「この手が」

鵜野森の手が、俺の指を握ったり、離したりする。

「この手が、わたしを、つかまえた」

「……」

「おもに、頭を」

「それ、必要？」

「微妙」

「なぜつけくわえた……」

「続きは？」

「なんの？」

「さっきの話」

「……なんの話だったっけ」

鵜野森が、俺の質問に答えて、なにか言おうとする。

が、ちょうど次の飛行機が飛び立つところだった。ふたたびの轟音があたりを席卷する。さつきよりはだいぶ暗くなった空に、照明を瞬かせながら、飛行機が消えていく。

「思い出した」

「うん」

盆地の小さな都市で。海沿いの風の強い街で。東京と別に変わらないようなビルだらけの都会で。不安と、郷愁と、さびしさと、そんなようなものが入り混じった、どこかくすんだ色彩の暖色のような感情に包まれつつ、俺はいつも思っていたのだった。

「なんか、遠くまで来たな」

「うん」

だれかが、こんなふうには、答えてくれないかな、と。

なにかを、発する。

だれかが、答える。

そうして、同じ方向を向く。歩き出す。知らないどこかへ。あるいは知っていたどこかへ。帰るべき場所へ。

俺は言った。

「帰るぞ」

「え、それはいや」

「……」

この期に及んで、こいつは……。

頭掴んだ。

「や、やめ、帰らない、ぜったい、帰ら……」

「黙れ」

「ま、まって。ちょっとだけ」

そう言つて、鵜野森は、空にスマホを向ける。

軽い電子音が響く。

「終わった」

「……写真？」

「うん」

翌朝。

目覚ましもかけていないのに、いつもどおりの時刻に目が覚めた。習慣というのはおそろしい。

「……」

ベッドの上であぐらをかいて、ぼーっとする。

結局、昨日のはいったいなんだったのか。

俺の旅は日帰りで終わったし、なんなら旅行かどうかすら怪しかった。家に帰ったときの、母ちゃんの微妙な反応もつらかった。

スマホを手取る。鵜野森からはなんの連絡もなし。

昨日の帰り道、二時間くらいはあったと思うが、それだけの時間をかけて俺が得た成果は、連絡先の交換のみ。緑色の画面を立ち上げると、そこには昨日のやりとりがある。

『すごく怒られた』

『おつかれ』

それだけである。

ああ。

俺は手で顔を覆う。もうちょっとなんかないのか。彼氏の有無の探りを入れるとか。しかし、しかしだ。なぜそんなことをきく、とか真顔で言われたら、きっと3週間は立ち直れないに違いない。いったい世の男女はどうやってこの難関を乗り越えてカップルとやらになるというのか。そもそも鶴野森にそういう関係が理解できるのか。概念としては知っている、なんて答えられたらそれはそれでしんどすぎる。

俺は考えるのをやめた。

時間はある。俺にも、おそらく鶴野森にも。だから、これからだ。

カーテンを開ける。

昨日よりすっきりとした空だ。そしてたぶん、昨日より暖かい。

しみるように、青い。

スマホを空に向けた。

その写真を、鶴野森に送った。

折返して、写真が届いた。俺がいま見ている空と同じようで、少しかだけ雲の位置や形が違う、それだけの空の写真。

「そーいや、結局、目的は見失ってたな……」

昨日出かけたそもその理由となった写真。

それを見るべく、SNSのアプリを開いて、例の空の写真のアカウントを表示する。

今日も空の写真がある。コメントはなし。更新の時間はほんの1分前。さつき鶴野森とやりとりしたのと似た感じの空が写っている。

「……」

待てよ。

これ、似すぎてないか？

俺は2つのアプリを交互に見比べる。写真には、場所が特定できるような情報はなにもない。

「まさか……だよな？」

そのままスクロールする。ひとつ前はこのアカウントではついぞ見たことがない、夜の写真。とはいえ、まだかるうじて日の光はあって、画面の中心には、ほんやりと小さい飛行機のような影がある。その前は写り込んだステーキ屋の看板と空。さらにその前は、まさかのカレー。撮ってた。そういやあいつ撮ってた。

がつくりと、俺は窓枠に突っ伏した。

こんな偶然であるのか。あっていいのか。つーか俺以外のフォロワー、まさかのとつ

ぜんのカレーの写真に相当びびったんじゃないのか。

……だめだ。

わけのわからない衝動が込み上げてきた。その衝動は、表面化したときには、なぜか笑いというかたちになっていて、気がつくとき、俺は一人で爆笑していた。

「祥太郎、朝ごはん……って、なに一人で笑ってるんだい。気味の悪い」

「あ、いや。なんでもない」

涙まで出てきた。俺は目元を拭いながら言った。

「母ちゃん、俺、朝メシ食ったらちよっと出かけてくるわ」

「またかい。今度はどこに行くんだ」

「……」

どこだろう。そもそも俺は鵜野森の家すら知らない。

けど、まあ……。

「探してた行き先が見つかったんだよ」

「……どうにも、うちの男連中の言うことはよくわからないね。陽気にでもやられたのかい」

「男連中って、父さんも？」

「ああ。結婚する前後にね、そんなようなことを言ってたね、よく」

「……そっか」

「なにを納得してるんだか。早く下りといで」

「ああ」

外に出てみると、桜さえ咲きそうな、茫洋とした春だった。仮に、祝福された日というものがあるのなら、その日はきつとこんな天気だろう。今日も世界のどこかではきつと悲惨なことが起きていて、あるいは、たえようもなく幸福なことが起きていて、出会いや別れや、死や生や、さまざまなことが起きているに違いない。それらすべてを含めて、世界は動いており、俺は生きている。歩くことができる。

空を見上げた。

——しみるように、青い。

人にはだれでも、一生に一度、空がたとえようもなく青く見える瞬間がある。どこかの本で、そんな文章を読んだことがある。それがいまなのかはわからない。けれど俺は、い

まから鵜野森の家に着くまでの25分間のことを、きっと忘れることはないのだと思う。畑と、古い民家と、錆の上がつたトタンの倉庫。なんの特徴もない田舎。見飽きた光景。その先に、きっとさんざん怒られて半泣きになっているだろう鵜野森がいる。

「そーいや……」

なんとなくスマホを取り出す。

探していた青い鳥は、身近なところにあつたのです、ではないけれど、あれが鵜野森のアカウントであることがわかった以上、少しは見覚えのある風景があるのではないか。そんなことを思いつつ、アプリを立ち上げてみた。

カレーの写真が圧倒的な違和感を放つ以外は、淡々と空の写真ばかりが並んでいる。

空は、ただの空だ。

けれど、空の写真は、ただの写真ではない。

そのとき、そのだれかはきっと空を見上げたのだ。俺が何度もそうしていたように、そこにはないものを求めて、空を見上げた。

鵜野森と、話したいと思う。どんな空を見てきたのか。なにを思ってきたのか。そしてこれから先、桜が咲いて、鬱陶しい梅雨が来て、やがて夏が来て、そのとき鵜野森はなにを見るのか。

投稿のペースはまちまちで、そもそもの投稿数が少ない。スクロールしているうちに、いちばん最初の投稿にたどりついてしまった。

日付は、3年前の4月201日。

教室のガラス窓を通した、夕暮れの写真。

そのアカウントで唯一、テキストが添えられた写真でもあった。そこには、こう書かれていた。

今日、はじめて、だれかと同じ空を見た。

